麻績の里 座光寺便 38号　令和3年12月 発行■麻績の里ふるさと応援倶楽部（飯田市役所座光寺自治振興センター内）長野県飯田市座光寺2535　0265-22-1401

麻績の里 座光寺便
2021.12 No.38

座光寺トリビア Vol.5

くだものづくり

今昔

いまむかし

果樹栽培は座光寺の基幹産業。恵まれた段丘地形を活かして、一年を通しさまざまな果樹がつくられています。

ところで、座光寺で果物づくりはいつごろ始まり、どのように発展してきたのでしょう。また、新しい栽培法による座光寺果樹の将来は…。果物づくりの過去・現在・未来に迫ります。

梨の百年木

三村貞美さん（原）の祖父・芳三郎さんが、大正9年（1920）に植えた梨の樹園地。桑畑の一角に植えられた苗木は、100年を経ても現役で大きな実を結ぶ。幹周り2メートル、主枝15～20メートルに及ぶ、堂々たる古木。

座光寺 街角探訪

南アルプスの絶景を望む大門原地籍

パノラマファーム大門

大門原地籍は座光寺地域の最上段。標高650mほどの一番の高台にあり、南アルプスを一望できる絶好の場所にあります。その大門原地籍では、農家の高齢化や後継者不足、それに伴う遊休農地の増加が大きな課題となっています。

座光寺地域自治会ではこのような絶好の農地を何とか守りつなげていきたいとの思いから、「遊休農地の有効な利活用を考えて、地域の活性化につなげよう」と呼びかけ、自治会を中心とした有志により遊休農地を活用した地域振興に取り組む組織の立ち上げを検討し、平成24年度に座光寺地域自治会の特別委員会として「パノラマファーム大門」が設立されました。会員は約40名です。

そばやりんごの栽培の他、原野化防止のための除草作業、フジバカマの維持によりアサギマダラが舞い降りる里に仕立てていく活動に取り組んでいます。コロナの影響でここ数年はとまっていますが、体験教育の受入れや、渋谷区や奈良市との交流も行っています。交流の中で生まれたシードルやジュースの商品化も目指しています。

今年は、新たに南天の栽培に取り組みました。出荷までには数年かかりますが、いったん株が根付けば毎年確実な収穫が見込まれ、維持管理も容易とのことなので、大変期待をしています。また、昨年渋谷区との交流事業で、渋谷区の皆さんと一緒に植えた「渋谷りんごパーク」のりんごの木も順調に育っています。

座光寺スマートICが開通し、パノラマファーム大門は中央道を降りてすぐの場所になりました。都会の方にはもちろんですが、地域の皆さんにも知ってもらって、大門原の魅力、将来の姿、活用方法を考えていきたいと思います。

アサギマダラ

りんごの木のオーナーになりませんか！

20地区応援隊（地区版ふるさと納税）で、座光寺地域に5万円以上のご寄附をいただいた方には、5年間りんごの木のオーナーになっていただきます。りんごの木はパノラマファーム大門で大切に管理し、随時生育の様子をお知らせします。実ったりんごは収穫してお持ち帰りいただけますが、収穫にお越しいただけない場合は、シードルにして保管いたします。

お申込み:座光寺自治振興センター ☎0265-22-1401

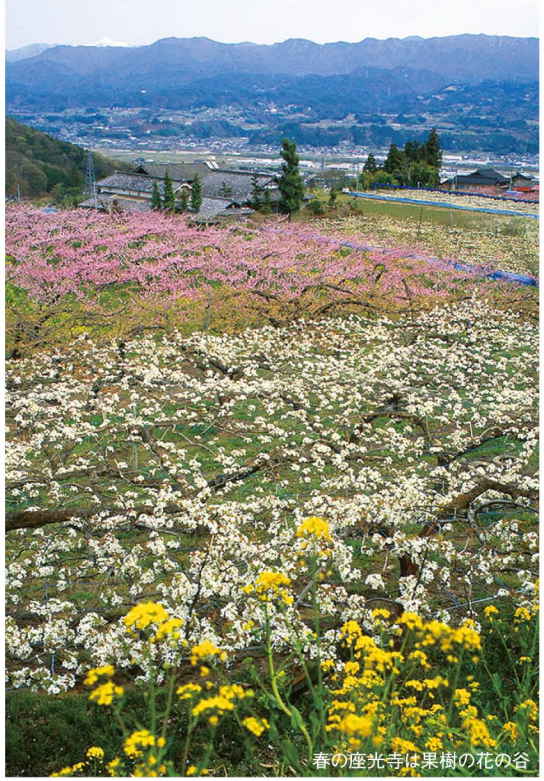
くだものづくり 今昔（いまむかし）

座光寺トリビア Vol.5

果樹栽培事始め

明治19年（1886）、上郷村（当時）下黒田で梨3反歩が定植され、南信州で最初の果樹栽培とされています。座光寺の果樹栽培は大正9年（1920）ころ上段地域を開墾し、桃と梨の畑が拓かれました。これ以降、桃・梨は地域に少しずつ広がっていきます。

りんごは大正15年（1926）に、三村芳三郎さん（原）の手で植えられたのが最初とされています。


春の座光寺は果樹の花の谷

戦後の隆盛期

終戦後、座光寺の果樹産業は桃・梨を中心に大きく成長します

桃は昭和30年代後半、出荷箱数で5万箱を超え、39年（1964）に6万7千箱に達します。梨も同じ時期に6万箱を越し、やはり39年に9万2千箱と隆盛を迎えました。下伊那郡下総生産量（下伊那園協総出荷量）の20％を占める大生産地に成長したのです。

当時携わった人々の声を、今年歴史に学び地域をたずねる会で発行した『語り継ぎたい「昭和・平成の記憶」』から転載します。

「昭和25年、家の傍の畑と原の畑に二十世紀梨と、当時盛んにつくられていた大久保という桃を植えました」（熊谷 滑（きよし）さん）

「終戦後は養蚕はだめになったんで、果樹栽培に取り組んだ。二十世紀梨を1反歩植え、大久保・白桃・天津・土用水蜜などの桃を植えた」（宮崎 利雄さん）

「栽培面積も拡大し機械化も進み、栽培技術も向上し、ダンボール梱包材などの進化もあり、果樹の売上高は座光寺がトップで全国からも注目されるようになった」（宮崎 利雄さん）

「終戦後に二十世紀梨が増えたんですよ。昭和34～35年ころが最盛期だったと思います」（今川 博司さん）

選果と出荷の変遷

それまで座光寺に9箇所あった選果場は、昭和39年（1964）現在の施設に統合されました。昭和44年（1969）8月26日、当時の皇太子ご夫妻（現上皇・上皇后）がこの選果場の視察に訪れています。

また昭和36年（1961）には、それまでの木箱に代わってダンボール箱が登場し、出荷の効率化が図られました。当時の様子を先の『語り継ぎたい「昭和・平成の記憶」』から転載します。

「（木の）箱づくりをやりますと、1軒の家で2千箱というような数になってしまう。その日に打って（つくって）いたのでは間に合わないんで、春先から前倒しして打っていき、家の中へ積み上げておきました。すると寝るところがなくなって、廊下に寝た、庭に寝たなんていう話もあったようです」（今川 博司さん）

「選果場の統合は、地域と水利権を共有する仲間たちの選果場という愛着心もあり、ひとつにまとめるために（農家の）仕事が空く夕方から話をして、家に帰ったのが朝というのが何回もありました。理解を得るのが難しかった」（今川 博司さん）

「ダンボールができるまでは、りんごも桃も梨もみんな木箱だったので、自分の家で叩いて箱をつくって、それを持っていって荷造りするという流れでした」（塩澤 要七さん）

果樹栽培の大変革

現在、全国の果樹生産量の筆頭は、りんごとみかんですが、このりんご栽培には大きな変革がいくつかありました。まずは品種の更新です。「国光」「紅玉」「旭」など海外で生まれた品種に代わり、「つがる」「ふじ」などの優れた日本原産品種が生まれ、これによりりんご需要は大きく伸長しました。

次に、それまで経験値が要求された接ぎ木が、誰でも容易にできるようになったこと。そしてわい化栽培の普及により、産地拡大、反収増加が進んだ点が挙げられます。そして現在、この延長線上にあるのが「高密植栽培」です。

高密植栽培の普及

高密植栽培とは、簡単にいえば、樹間を1メートル以下にし、養分を効率よく果実に送り込むことで、均質果実を低コストで省力生産する栽培様式。植えて2年目から収穫が可能で、5年目に反収4～5トンをめざします。着色管理（葉摘み、玉回し、袋掛け、枝吊りなど）や収穫の手間も軽減する栽培法で、いまでは世界の果樹栽培の主流になっているといいます。

りんごの高密植栽培

座光寺では15年ほど前からこの栽培法に取り組んできました。その推進役のひとりが三村貞美さんです。三村さんは元長野県専門技術員で、JA全農長野の技術審議役としてこの栽培普及に当たってきました。

従来のりんご栽培は定植して5～10年は樹の骨格をつくるのが常識でした。しかし高密植栽培は樹体を支えるのはトレリス（支柱）で、樹に向かっていた養分をできるだけ果実に送り込みます。三村さんは「従来は光合成産物の35％程度しか果実に分配されなかったものが、この方法では60％ほど果実に行く」といい、「高密植栽培により産地の維持が可能になる」ことに大きな期待を寄せています。

座光寺の風土を活かして

果樹栽培は工業製品と違い、土地の気候風土が大きな決め手となります。しかし、その点で座光寺はどこにもない強みを持っています。

座光寺は日較差（一日の寒暖の差）が10度前後あり、標高も最適地とされる500から600メートル。さらに果物の栽培には水はけの点からゆるやかな丘陵地形が良いとされます。これらの自然条件をすべてもっている座光寺は、先人の努力が実り「くだものの里座光寺ブランド」として、これまでも、そしてこれからも果物の里であり続けることでしょう。